



A TREASURY OF WORLD LITERATURE



新集 世界の文学

23

ペンギンの島 近藤矩子訳

ブルージェ

アンドレ・コルネリス 田辺 保訳

中央公論社

A・フランス

プールジェ

訳者 近藤 矩子
田 辺 保

昭和45年 2月25日 初版印刷

昭和45年 3月 5日 初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

A・フランス

ペンギンの島

ブルジュエ

アンドレ・コルネリス

解説

年譜

3

241

199

527

ペンギンの島

序言

私の心にかなうような慰みごとは、一見多々あるかに思われるけれども、私の一生の目的はただ一つしかない。私の全生涯は、ある偉大な計画の遂行に捧げられているのである。私はベンギン人の歴史を書くのだ。ときとして克服しがたく思われる、おびただしい困難にも屈することなく、私は營々としてこの仕事に励んでいる。

この国民の埋もれた遺跡を発見すべく、私は大地を掘った。人類の最初の書物は石であったのだ。私はベンギン人の初期年代記ともいえる石を研究した。私は海のほとりで、だれもまだ荒らしていない、とある古墳を発掘した。そこには慣例どおり、石斧、青銅の剣、ローマ貨幣若干、そしてフランス人の王ルイ・フィリップ一世（在位一八三〇―一八四八。彼は議會によつて、「フランスの王」でなく「フランス人の王」として推戴された。）の肖像を刻んだ二十スー貨一枚などが見いだされた。

有史時代にはいつてからは、ベアルガルデンの僧院の修道士、ヨアネス・タルバの著わした年代記が大いに役に立った。中世初期のベンギン史に関しては、他の資料がまったくないだけに、私のタルバに負うところはきわ

めて深い。

十三世紀以降、資料はずつと豊富になる。豊富にはなるが、それで都合がよいというわけのものではない。歴史を書くのは実にむずかしいことだ。物事がいかに進行したか、正確には決してわからないのである。そして資料が多ければ多いほど、歴史家の困惑も増す。ある事実についてただ一つの証言しかなければ、さしてためらわずにこれを採用する。だが二人あるいはそれ以上の証人が事件を報告している場合が困る。彼らの証言はかならず矛盾し、互いに相容れないものであるからだ。

なるほど、ある証言を他の証言よりよしとする科学的理由が、きわめて強力であるという場合はままある。しかしそれが、われわれの情熱、偏見、利害に打ち勝つほど、まったくそまじめな人間には共通なあの精神的浮薄さを克服するほどに、強いことは決していないのである。したがってわれわれはつねに事実をば、なんらかの利害にとらわれた、あるいは軽はずみな仕方、呈示することになるのである。

私はベンギン人の歴史を書くにあたって感ずる困難をば、わが国の、また外国の、令名高い考古学者や古文書学者たちに打ち明けてみた。彼らは私を軽蔑した。彼らはあわれむような微笑をうかべて私を眺めたが、その微笑は次のような意味にとれた。「いったいわれわれが歴

史を書いているかね。何かのテキスト、資料から、人生や真実のかけらでも引っぱり出そうとしたりしているかね。われわれは純粹かつ單純に、テキストを刊行するだけだ。われわれは文字に書かれたものを固守する。文字だけが明確であり、評価に値するものだ。精神はそうでない。觀念なんて幻想にすぎぬ。よほどくだらぬやつでなければ、歴史など書かない。想像力でももっていないからね」

すべてこれらのことが、わが古文書学の大家たちの視線と微笑のなかにこめられていたのであって、彼らとの對話は私の勇気をそぐこと大であった。ある日、一人のすぐれた印章学者と言葉を交したのち、私はつねにもまして意氣阻喪していたが、そのときとつぜん次のようなことを考えたのである。

「それだって、歴史家というものがあるではないか。歴史家という種族が絶滅したわけではない。五、六人は人文科学^{デヒューマン・サイエンス・モラル}学院にとつてある。あの人たちはテキストの刊行をするのじゃない。歴史を書いているのだ。あの人たちなら、こういう仕事をするにはくだらぬやつでなければ、などとは言わぬだろう」

こう考えるとふたたび勇氣がわいた。

その翌日——ふつうこういうが（本来ならその翌日^{ハランド・ソーン}）——私は彼らの一人である、才

すぐれた老人のもとを訪れた。

「先生」と私は言った。「私は先生のご経験に富んだご忠告を仰ぎにまいったものです。私は歴史を書くこうとして苦勞しておりますが、うまくゆきませんので」

彼は肩をすくめて答えた。

「きみ、そんなに苦勞してなんになるのかね。それにどうして歴史など書くのかね、だれでもやっているように、いちばん有名な歴史書を敷き写しさえすればいいというのに。もしきみが何か斬新な見地とか、独自の見解とかをもっているなら、もしきみが、思わぬ角度から事象や人物を呈示するなら、きみは読者を驚かせるだろう。ところが読者というものは、驚かされることを好まないのだよ。読者が歴史書に求めるのは、彼が先刻ご承知のくだらぬことだけなのだ。もしきみが読者を教育しようとするれば、彼に恥をかかせ、怒らせることになるだけだ。読者の蒙を啓こうなどとしてはいけない。そんなことをすれば、彼はきみが彼の信条を侮辱したと、非難の叫びをあげるだろう。」

歴史家たちは、お互いに写し合いをしているのだよ。

こうやって勞力を節約し、かつ、うぬぼれの強いやつとみられることを避けているのだ。きみもこれを見習って、独創的になることは控えたまえ。独創的な歴史家というものは、どこへ行っても不信と侮蔑と嫌悪をもって見ら

れるものなんだ。

ねえきみ」と彼は言葉をつづけて言った。「もしわしの書いた歴史書のなかに、斬新な見解が盛りこんであったとしたら、わしがいまほど高く評価され、尊敬されていると思うかね。斬新さとはいったい何か。無作法にすぎぬ」

彼は席を立った。私は彼の好意を謝して辞去しかけた。彼は私を呼びとめた。

「もう一言いうことがあった。好評を博したいと思うなら、きみの書物のなかで、あらゆる機会をとらえて、社会の基礎となる美徳を賞揚したまえ。たとえば富への献身とか、敬虔な感情とか、またとくに、秩序の根本たる貧者の諦観とかだ。きみの本なかでは、所有権、貴族、憲兵といったものが、これらの諸制度にふさわしい十分な敬意をもって取り扱われるということ、はつきりさせたまえ。超自然的なものを受け入れる用意があるということ、を、いっておきたまえ。こうすれば、きみは立派な人々の賛同を得ることになるだろう」

私は分別に富んだこの意見について、よく考えてみた。そして十分にこれを顧慮することとした。

私はここで変身以前のペンギンについて考察する必要はないのである。彼らはいわば動物学より出でて歴史と

神学にはいる瞬間から、はじめて私の取り扱うべき対象となるのだ。偉大なる聖マエールが人間に変身せしめたのは、まさしくペンギンであった。しかし今日では、この語のさすところがやや曖昧であるので、若干の説明を必要とする。

われわれがフランス語でペンギンと呼ぶのは、アルシデ科に属する北極地方の鳥である。南極に棲むスフエニシデ科のものを、われわれはマンシヨと呼ぶ。されば、たとえばG・ルコアント氏はそのベルジカ号航海記(原註に、こう書いているのである。「ジェルランシュ海峡に棲む鳥のなかで、マンシヨはたしかにいちばん興味あるものである。これはときとして南のペンギンと名づけられているが、この呼び方は正しくない」これに反して、J・B・シャルコ博士は、真のかつ唯一のペンギンはこれら南極の鳥であると明言しており、その理由として、この鳥は一九八八年にマジラン岬に到達したオランダ人たちから「ピンギノス」という名前をもらったのであり、それはたぶんこの鳥が脂肪に富んでいるからだだろう、といっている(「脂肪質の」という意味)。しかし、もしマンシ

原注 G・ルコアント著『マンシヨの国にて』ブラッセル、一九〇四年、八折判。

* ベルジカ号は一八九七・一九九九年に、ベルギー人アドリアン・ド・ジェルランシュの指揮のもとに、南極を探検し、初の極地越冬を試みたノルウェー船。

ヨをペンギンと呼ぶならば、ペンギンのほうはなんと呼んだものだろうか。J・I・B・シャルコ博士はそのことには触れていないのみか、気にかけている様子すらいっ
こうないのである。(原注)

まあよい、シャルコ博士のマンショが、ペンギンになろうと、あるいはペンギンにもどろうと、それに同意せずばなるまい。彼はこの鳥を広く紹介したのだから、好きなように命名してもよからう。しかし、北極地方のペンギンが依然としてペンギンであることのお許しは願いたいものである。かくて南のペンギンと北のペンギン、南極のと北極の、アルシデ科あるいは古くからのペンギンと、スフエニシデ科あるいはかつてのマンショとが存在することになる。このことはたぶん、游禽類を分類叙述しようとする鳥類学者をとまどわせるだろう。彼らは、両極に棲み、いくつかの点、とくに嘴、翼端、脚などにおいて異なる二つの科の鳥に、一つの同じ名をつけてよいものかどうかと考えるにちがいない。私自身に關していえば、この曖昧さはいっこう気にならないのである。私のペンギンとJ・I・B・シャルコ氏のそれとの間には、相違が多々あるにせよ、相似する点のほうがいっそう多くかつ強いように思われる。どちらも、重々しく穏和な態度、滑稽な威厳、楽天的ななれなれしさ、からかい好きらしい、人のよい様子、ぎこちなくて仰々しい身

のこなしなどを特色としている。どちらも平和的で、おしゃべり好きであり、物見高く、公の事件に熱中し、また、人の上に立つことを好むらしい。

私の北方族ペンギンの翼端は、実は鱗状でなく、短い羽でおおわれている。彼らの脚は、南方族ペンギンほどうしろについてはいないが、やはりしゃんとたつて、頭を高く挙げ、もったいぶった様子で身体を振りながら歩く。彼らの堂々たる嘴(突出した骨)は、彼らを人間と取り違えた聖者の誤りを、少なからず助長したものである。

本書は、旧式の史書のジャンルに属する、ということ
を私は認めねばならぬ。すなわち、その記憶をとどめる
ような事件を順を追って述べ、できるかぎり因果関係を
明らかにしようとする種類のものだ。これは科学という
よりも芸術である。このようなやり方は、正確を好む精
神をばもはや満足せしめないし、旧きクリオ(ミューズの
ご女神)は今日ではくだらぬおしゃべり婆さんと思
われぬ、とはよくいわれるところだ。なるほど将来にお
いては、もっと確実な歴史というものが生まれるかもし
れぬ。ある時代のある民族が、その活動の全般において、
何を生産し何を消費したかを教えてくれるような、生活
条件の歴史である。そういう歴史ならばそれはもはや芸

術ではなく、一個の科学であつて、古い歴史のもたなかつた正確さをめざすことであらう。しかし、こういった歴史が成立するためには多数の統計を必要とするが、そういう統計はいままでのところ、あらゆる国民、とくにペンギン人において、欠けているものなのだ。近代的な国家は、いつの日か、このような歴史の材料を提供してくれるようになるかもしれない。だが人類の過去に關していえば、あいかわらず旧式の物語で満足していなければならぬのではないかと私には思われる。このような物語の意義いかんは、かかつて語り手の悲眼と善意とに左右されるものである。

アルカのある大作家が言っているように、一国民の歴史は犯罪と不幸と狂気とで織りなされている。ペンギン国においてもそれは例外ではない。しかしながら、ペンギン国の歴史には嘆賞に値する箇所もいくつかあるのである。私はそれに正しい光をあててみたつもりである。ペンギン人は長期にわたつて好戰的國民であつた。彼らの一人である哲學者ジャコは、あるささやかな風俗描写のなかで、ペンギン人の性格を描いている。これを次に引用させていただくが、読者はかならずや興を催されるであらう。

「竜王朝も末のころ、賢者グラティアンはペンギン國を遍歴した。ある日彼は、牝牛たちのつけた鈴の音が澄ん

だ大氣のなかに鳴りひびく、さわやかな山あいにさしかかり、とある藁ぶきの家のかたわらの、樫の木の下にしつらえられた腰掛けに腰をおろした。家の入口では、一人の女が子供に乳房をふくませていた。男の子は大きな犬と戯れていた。一人の旨いた老人が陽だまりにすわり口をぼかんと開けて、太陽の光を飲みこんでいた。

その家のあるじは若くたくましい男であつたが、グラティアンにパンと乳とをすすめた。

ねずみいるか國の哲學者はこのひなびた食事をとり、そして言つた。

『やさしき國のやさしき人々よ、ありがとう。ここではすべてが喜びと和合と安らぎとに息づいている』

彼がこう言つたとき、一人の羊飼が行進曲の節をミュゼットで鳴らしながら通つていった。

『あの活発な曲はなんですか』とグラティアンはたずねた。

『あれはねずみいるか人たちとの戦いの歌でさあ』と農夫が答えた。『ここじゃみんなあれを歌つとりますよ。子供たちは、しゃべることよりもさきに、あの歌を覚えるんですよ。わしらはみな善良なペンギン人なのでね』

『あんたがたは、ねずみいるか人を好いておられぬのか』

原注 J・B・シャルコ著『フランス南極探検隊日誌』一九〇三年、一九〇五年、パリ、八折判。

な』

『あいつらは大嫌いでさ』

『どういふわけで憎んでおられるのかな』

『そんなことをお聞きになるなんて。ねずみいるか人たちは、ペンギン人の隣人じゃないですか』

『いかにも』

『そうでしょう。だからペンギン人はねずみいるか人を憎むのでさ』

『それが理由になるじゃろうか』

『なりますともさ。隣人すなわち敵ですよ。わしの畑と地続きの畑を見てくたせえ。あれはわしがこの世でいちばん憎んでる男の畑でさ。その男に次いで、わしの最悪の敵といえは、あの向こうの斜面の、樺の林の陰の部落のやつらですよ。この狭い谷あいはどこからも切り離されていて、あの部落と私の部落としかないんです。それで敵同士というわけさ。うちの村の者があつちのやつと出会えば、そのたびに悪口を言いつたり、なぐりあつたりするんでさ。だのにあんたは、ペンギン人がねずみいるか人の敵でなければいい、なんて思いなざるのかねえ。あんたは愛国心のなんたるかをご存じないのかね。わしなんぞ、この二つの叫びが胸からほとばしりてゐるのだがねえ——ペンギン人ばんさい、ねずみいるかの野郎くたばれ』

千三百年もの長きにわたり、ペンギン人は不屈の熱意をもって、世界のあらゆる国民に戦争をしかけたものであるが、その成果たるやさぎまであった。ついで何年かのあいだに、彼らはあんなに長いこと好きだった戦争がいやになってしまい、平和に対して強い好尚を示すにいたつた。彼らはもったいぶってではあったが、真情こめてこの気持を表明した。ペンギン国の將軍たちは、この新しい気分にしっくりはまっていた。全軍はあげて、士官も下士官も兵卒も、新兵も古参兵も、喜んでこれに順応した。ただ三文文士と図書館の鼠が不平を言つていたし、いざりはどうしても諦めきれなかった。

この同じ哲学者ジャコは、一種の道徳的物語をコミックな力強い筆致で描き出しているが、そこに彼の母国の歴史から得た素材をも織り込んでいる。若干の人々は、なぜこんないんちき歴史を書いたのか、祖国がそれからどんな利益を得ると思うのか、と彼にたずねた。

「非常に大きな利益である」と哲学者は答えた。「このように滑稽化され、自尊心におもねるものをすべて取り去つた形で、自身の行動を眺めることにより、ペンギン人たちは、それらをよりよく判断できるだろうし、たぶんそのことによって、もっと賢くなるであろう」

私は芸術家諸賢の関心をひくに足る事柄は、すべて本書に盛りこみたいと念じたものである。読者は中世ペン

ギン絵画についての一章を、本書のなかに見いだされるであろう。この章が私の心がけたほど完璧でないとしても、それは私の罪ではない。次に述べる恐ろしい物語をもつて私の序文の結びとするが、それをお読みいただければ、いま私の申ししたことをご理解いただけると思う。

昨年六月のことであったが、私はふと思ったって、『世界絵画・彫刻・建築史』の博学な著者、故フュルジャンス・タピール氏のもとに、ペンギン芸術の起源と発展について質問しに行った。

書斎に通されて、私が見たのは、うずたかい書類の山に埋もれて、円筒形の机に向かっている、ひどい近眼の小男で、その臉は金縁眼鏡の奥でしきりにしばたいていた。

その眼の欠陥を補うべく、彼の鼻は長くのび、運動自在で、優れた触覚を賦与されており、感覚の世界を探り回るのがだった。この器官によつてはじめて、フュルジャンス・タピールは芸術や美と接触していたのである。人も知るとおり、フランスにおいては、音楽批評家が聲であり、美術批評家は盲であることが多い。このことが、美的思索に必要な沈潜を可能にするのである。もしフュルジャンス・タピールにして神秘な自然の装いたる形態や色彩に対し鋭敏な眼をもっていたならば、彼が活字や手書きの資料の山を攀じて、かの精神主義的学理の頂に

いたり、あらゆる国あらゆる時代の美術をばその究極の目標すなわちフランス学士院に集中せしめる、かの強力なる学説を築くことになったろうとは、とても思われなではないか。

書斎の壁にも床にも、天井にすらも、あふれるほどの書類の束、はちきれそうにふくらんだ紙ばさみ、無数のカードがぎっしり詰まった箱などが並んでいた。私は畏怖をまじえた驚嘆の念をもつて、このいまにも崩れ落ちそうな博識の滝をまじまじと眺めた。

「先生」と私は感動した声で言った。「私は先生のご親切とご学識——その二つながら汲めども尽きぬものでございますが——におすがりしにまいったものであります。ペンギン美術の起源について、困難な研究をいたしております私に、ご指導を賜わるわけにまいりませんでしょうか」

先生は答えられた。

「わしはすべての美術を所有しとる、いいかね、すべての美術をABC順と分類別に整理したカードにして持つとるのじゃ。ペンギン人に関係のあるカードをきみのお役に立てるのは、わしの義務じゃよ。この梯子にのつて、あの高い所に見えてる箱を取りなさい。あの中に、きみに必要なものがぜんぶはいっとるじゃろう」

私はふるえながら彼の言葉に従った。だが私がその運

命的な箱を開くか開かないうちに、水色のカードがそこからこぼれだし、私の指の間をすべりぬけて、雨のように降りそそぎはじめた。と見る間に、感応作用によってか、隣に並んだ箱も口を開け、ばら色と緑と白のカードの小川が流れ出した。こうして次から次へと、あらゆる箱から、さまざまな色合のカードが、あたかも四月に山腹を流れおちる奔流のごとき音をたてて、あふれ出たのであった。一瞬にして、カードは床を厚い層で埋めてしまった。それはたえず大きくなる轟きとともに、尽きせぬ潭からわきほとばしり、なおも秒一秒と滝のごとく落ちてきた。膝まで埋まったフエルジャンス・タピールは、注意ぶかい鼻でもって、この大洪水を観察した。彼はその原因を悟り、恐怖に青ざめた。

「なんとという美術だ」と彼は叫んだ。

私は彼の名を呼び、身をかがめて、カードの雨にしないつつある梯子を、彼が攀じるのを助けようとした。だがもうおそかった。いまや彼は打ち砕かれ、絶望し、哀れな様子になり、ビロードの頭巾も金縁眼鏡もなくしてしまつて、脇の下までのぼってきた波に、短い腕でむなしい抵抗を試みていた。とつぜん怖るべきカードの竜巻が起こつて、彼を巨大な渦にまきこんだ。ほんの一瞬のあいだ、私は渦の中央に、この学者のつるつる頭と肥った小さな両の手を見た。次いで深淵は閉じ、すべてが沈

黙し動かなくなつたうえに、洪水はなおもそそぎあふれたのである。私自身にも梯子ごと呑みこまれる危険がせまってきたので、私は窓のいちばん高いガラスを破つて逃げ出したのであった。

キブロンにて、一九〇七年九月一日。

第一の書 起源

第一章 聖マエールの生涯

カンブリア(ウェールズ)の王族の出なるマエールは、九歳に達すると、イヴェルンの僧院に送られて、聖俗両様の文芸に親しんだ。十四歳のとき彼は相統権を放棄し、主に仕えまつる誓いをたてた。彼は掟に従って、聖歌の奏唱と、文法の研究と、永遠の真理についての瞑想とに、時を分かち過ごしていた。

この修道士の徳は、まもなく僧院内にも、こうごうしい気配をもってそれと知られた。そしてイヴェルンの僧院長、至福なるガルがこの世からあの世へと移り逝いたとき、若きマエールはそのあとを襲って、僧院を治めた。彼は僧院内に学校、病院、客人を泊める宿舎、鍛冶場、あらゆる種類の仕事場に、船を作る作業場などを建てた。彼はまた修道士たちをして、近隣の土地を開拓せしめた。彼自身も手を下して、僧院の庭を耕し、金属を細工し、新参の僧を教育した。かくて彼の生涯は、あたかも空を

映し田野を潤す河のごとく、おだやかに流れゆくのであった。

陽の沈むころ、この神の僕は海に臨む崖の上に来て腰をおろすのを習わしとしていたが、その場所は今日もお聖マエールの椅子と呼ばれている。彼の足もとには、緑と褐色の海藻におおわれた黒い竜のような岩々が、恐ろしい胸を張って、波のしぶきに対峙していた。彼はあたかも真紅のご聖体のごとき太陽が海に沈んでゆき、その栄光満てる血の色で空の雲と波の頂とを赤く染めるのを、眺めるのであった。そして聖者はこの眺めに、聖なる血が大地を王者の真紅をもって染めた、十字架の神秘のみ姿を読んでいたのである。沖には、くすんだ青の線が、ガドの島を示していた。その島では、聖マロに導かれて尼となった聖女ブリジッドが尼僧院を治めているのであった。

さて、尊むべきマエールの徳を伝え聞いたブリジッドは、使を派して、こよなき贈物として、彼の手に成る何ものかを、と請わしめた。マエールは彼女のために青銅の小さな鐘を鑄造し、それができあがると、祝福を与えて、海に投じた。すると鐘は鳴りつづけながらガドの岸に向かった。波の上をわたる鐘のひびきによってそれと知った聖女ブリジッドは、うやうやしくこれを迎えとり、尼僧たちを従えて、聖歌をうたいつつ莊嚴な行列をなし

て、僧院の礼拝堂に運びこんだ。

かくのごとく聖者マエールは完徳の道を歩んでいた。すでに生涯の三分の二をすぎ、彼はいまや霊の兄弟たちに囲まれて、おだやかにこの世の生を終えることをば期待していたのであるが、そのとき、紛うかたなきしるしによって、神の摂理はそうように定めたまわなかったこと、主はより労苦の多いものではあるがその功德もいっそう大なる仕事のために彼を召し給うということを、マエールは知ったのである。

第二章 聖マエールの伝道

ある日、海中にのびた岩々が自然の防波堤をなしている静かな入江の奥を、瞑想にせずみつ歩いてきたマエールは、舟のごとく水の上を漂っている石の飼槽に気がついた。

聖ギレック、偉大なる聖コロンパンをはじめ、スコットランドやアイルランドのたくさんの修道士たちが、アルモリツク（地方の古名）に福音を伝えたのは、これと同じような槽に乗ってであった。近くは、イギリスから来た聖女アヴオアも、ばら色みかげ石の臼に乗って、オーレイの川をさかのぼったのである。のちに人々は、子供たちを丈夫にするためにこの臼に入れるようになった。

聖ヴウガは岩に乗ってイヴェルニイからコルスアイユへ渡ったが、この岩のかげらはベンマルクに保存されており、巡礼がその上に頭をのせると熱病からいやされるのである。聖サンソンは、みかげ石の槽に乗って、モン・サン・ミシエルの入江についたのであるが、人々はこれを聖サンソンの鉢と呼びならわした。それゆえに、この石の飼槽を見たとき、聖者マエールは、ブルターニュの岸辺や島々になお多数住んでいる異教徒たちに福音を宣べ伝えるべく、主が彼を召し給うていることを了解したのである。

彼は自分の櫂の杖を聖者ビュドックに与え、かくて僧院の支配を彼にゆだねた。それからパン一個、真水一樽と聖書とを持って、石槽に乗りこむと、それは静かに彼をエディク島へ連れていった。

この島はいつも風にさらされている。貧しい人々は岩の裂け目で魚をとり、または、石を空積みした塀やタマリスの生垣で風よけをした砂や石ころだらけの畑を耕して、辛うじて野菜をつくっている。島のとある窪地には見事な無花果の木がそびえ、枝を四方に繁らせていた。

島の人々はこの木を崇めていた。

そこで聖者マエールは彼らに言った。

「おまえがたは、この木が美しいからこれを崇めておる。してみるとおまえがたには、美に感ずる心があるのじや。